

[027] 史淵表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2339177>

出版情報 : 史淵. 27, 1942-03-30. Faculty of Law and Letters of the Kyushu Imperial University
バージョン :
権利関係 :

九州史學會

九州史學會は昭和十六年十一月二十三日(祭日)午後一時より秋期例會を法文學部構内第二學生集會所に開催。秋晴れの好天氣にめぐまれ來會するもの多數で盛大であつた。講演題目は左の如し。

一、五代の武人政治と都市行政

助教授 日野開三郎氏

一、切支丹史料一二に就いて

教授 長沼 賢海氏

尙午後五時より醫學部内惠愛會館階上食堂に晚餐會を開催。席上史淵第二十六輯(昭和十六年十一月刊)を會員に配布其他二三の新入會員もあり、和氣藹々裡に研究發表を行ひ有意義なる催であつた。

檢斷を中心として見たる
興福寺講衆について

鈴木 止 一

檢斷とは刑事事件につき寺務・門跡から遣される尋使の調査、或は六方・衆中・講衆等が犯人の住屋へ進

發し、檢討や破却をする、それらを總括して檢斷と云つてゐた様である。檢斷に就ては南都の地域を大乘院領・一乘院領・寺門領の外に寺中・社頭の二つを加へて五地域に分けて考へるのが至當であると思ふ。

講衆とは種々の講問を開いて宗學の研究を行ふもので大僧正・僧正以下僧都・法眼・律師など講問に参加する僧侶の凡てを言ふ。講衆は上蔭・中蔭・下蔭の三階級に分れてゐて、年を経て昇進して行つたものであらう。この言はゞ學問僧の團體である講衆は反面に於て南都に於ける刑事事件について蜂起・罪科・進發を行つてゐる。斯様な武力的な警察活動を直接に學問僧たる講衆が行つたものとは考へられない處であるが、實は講衆の最下級たる下蔭分が行つたものである。「講衆進發」といふは事實上「下蔭分進發」に外ならない(こゝに下蔭分についての説明あるも省略)雜事記には、三个大犯(兒童・初鹿・講衆に對する犯罪)が起きた時には、上蔭集會によつて事件の糺明が行はれ、それを中蔭集會に傳へ、中蔭集會は又糺明を行ひ下蔭分に命じて進發せしめる。これを講衆集會といふとある。然し事實上はこの手續は實行されてゐないで實際的武力をもつ下蔭分は單獨に下蔭分集會を開き、上蔭・中蔭の講衆の集會評定を經ないで、自ら講衆と稱して檢斷してゐたのである。故に講衆の蜂起・集會

進發は下腐分のそれであつた。斯様な關係は講衆と下腐分の二つの名辭の混同を來し易く、雜事記には屢々それが混用されてゐる。

次に講衆は同じく南都の治安維持に當つてゐた衆中とその檢斷權につき、屢々衝突し紛争を惹起してゐる。既に應永の頃からその争ひがあり、爾來枚舉に違ない程であるが、時には戰鬪に迄及んだ事もあつた。かゝる紛争の原因の一つとして、兩者の檢斷權についての關係が複雑で、明確な規定がなかつた事を擧げる事が出来る。或は講衆は檢斷權の一部を衆中に譲つて、對立の緩和を計らんとしたが、その妥協が成立しなかつた事を見れば、兩者は最後迄抗争すべき運命を持つてゐたと云へるであらう。

次にこれら紛争の事件を通じて講衆の檢斷權の及ぶ範圍は本來如何であつたか、權限の原則的なものを探つてみる事とする。兩者が檢斷權について紛争を起してゐるのは社頭と寺中に發生せる双傷殺害事件・盗人事件に於てである。この範圍に於て講衆は、社頭及び寺中に於ける双傷殺害事件と社頭に於ける盗人事件を檢斷し、衆中は寺中及び社頭に於ける盗人事件を檢斷する。社頭に於ける盗人事件には兩者の檢斷が行はれる譯であるがそれには仕事の分擔があつた様である。それは社頭盗人檢斷の事例から歸納的に考へると、講

衆は犯人の住屋進發に當り、衆中は犯人の逮捕、糾問斷頭の處罰などを行つてゐた様である。但しこれには積極的な證據がなく、單なる推論の域を脱しない。猶講衆の檢斷と寺務・門跡との關係、或はその下剋上に就ても述べたいが時間的關係上割愛する事とする。

西洋史學研究會

John U. Nef, *Industrial Europe at the Time of the Reformation* (ca. 1515-ca. 1540).
(The Journal of Political Economy, Vol. XLIX (1941) No. 1 (February) pp. 1-40.
No. 2 (April) pp. 183-224.) (宗教改革時代に於ける歐洲の産業狀態—亞米利加經濟雜誌第四十九卷第一號及第二號) 辛島重義

「自由と産業との間には必然的な關係がある」と云ふアレクシス・ド・トックヴイルの言葉を冒頭にして中世經濟史の權威者であるネフ(シカゴ大學教授)は十二・三世紀の歐洲と十四・五世紀の歐洲とを對比して其兩者の相違の大きな點を産業の發達に求めてゐる。そして全章を五節に分ち、第一節には産業膨脹の時期としてのルネッサンスを通觀してダヴィンチ、デューラ、エラスムスとその生涯を終へる頃には歐洲は最早

原始的な産業状態にあるのではなく、伊太利、南部及東部獨逸、ライオンランド、和蘭、西班牙、佛蘭西などは今日以上、その建築にも工作品にも趣味と資源とが要求せられてゐたし、銀や鉛や錫などの産出も十四世紀の始めには十二世紀の中頃に比して数倍してゐた。銀銅は主として瑞西エルツゲビルゲから産出され、サクソニア、ボヘミア、ハンガリ等が之に次ぐ。かくて礦産資源の開発は産業の膨脹を將來し、奢侈品工藝品が産出されて來た。教會、商舖、都市等と建築物も増加して來る。又石油、石炭の燃料の必要は南部及中部佛シレジア、サクソニア、ウエストフアリア等に石炭發掘が盛行する。かくてルネツサンス期は中世紀に数倍する産業發達の躍進的體制を保持するのである。第二節には古都市及その附近に於ける産業上の組織を通觀する。十六世紀の初頭には第十四世に比して都市はニュルンベルグに於ては人口倍加し、ライプチヒは三倍しアントワープは四倍してゐる。ヴェ罗纳、ニュルンベルグ、アウグスブルグ、ブレスラウ、ダンチヒ、ストラスブルグ、モンペリエ、ブルジュ、リヨン、リール、ルーアン、バルセロナ、ロンドン等何れも人口二万乃至五萬に達してゐる。フロレンス、ヴェニス、アントワープは五萬を超えバリは十萬を超過する。之等の都市には商人達も多かつたが、鍛冶屋、刀物師、桶匠、

帽子製造人、手袋製造人等も居住してゐて彼等はギルドをなしてゐた。其他白蠟細工人、木彫工、金銀細工人、彫刻師、繪畫師、玻璃職工、銅版工等も又さうであつた。そしてこの第二節には彼等と商人とを對比してゐるのである。第三節には之等舊都市に於けるギルド的經濟を、新興都市の交換經濟とに對比する。第四節には地方産業に於ける經濟的專制主義の發達に就いて記してゐる。即ち製鹽業や、鐵山業が國家や統治者達によつて保護され、ルネツサンス時代の諸國の産業上に及ぼす影響の多大なるを認めてゐる。先づ製鹽業に就いて云へば、ヴェニス、ロレーヌ、其他政府の被護によるのであり十五世紀にはブルグンド公はフランシユ・コンテで岩鹽の製造に多大の援助を與へてゐる次に鐵山と金屬業については始めは石炭の發掘には封建的要求が多く、銀銅はサクソニア、チュリンギア、ティロル、カリンタイア等に幾多の精鍊所が出來、フツガー等はこれに多大の出資をなしてゐる。かくて鐵山業金屬業等の獨占的傾向はこれを所有する諸君主の富強を來して、ルネツサンスから宗教改革への移行の状態を招來する。ネフはこれらを證據するに各國各地方の事情を參照して比較的穩健中正の論をなしてゐる通觀的とは云ひながら豊富な文獻と精細な研究によつて當時の經濟を觀ようとする者にとつては多くの便宜

と注目を與へることを疑はない。

Paul Sweet, Erich Bollmann at Vienna in

1815. (The Amer. Hist. Review. Vol. XLVI.

(1941) No. 3 (Apr.) pp. 580—587) (維納に於

けるエーリヒ・ボルマン—亞米利加史學雜誌第四

十六卷第三號)

辛島重義

普通アメリカが歐洲の政治界並びに外交界に影響を及ぼしたと考へられるのは勿論一八二三年のモンロー宣言である。しかし佛蘭西革命に及ぼしたアメリカ獨立、維納會議後に於けるその態度等注目すべきものであらう。前者即ち佛革命への影響に就いては既に幾多の論著説述がなされてゐるが、後者に關しては比較的少いと謂はねばならない。維納會議は本來が舊大陸自體の問題に屬して新大陸の干渉すべき所ではなかつたし、又アメリカは當時バサマコデイ灣事件及メートカ海峽問題に深い關心を有してゐたし、その上維納ワシントン間には未だ正規の外交的な脈絡があつた譯でもない。この間にあつてアメリカを代表して維納に赴いたのはボルマン (Justus Erich Bollmann) である。昔てラファイエットを救援しエクス・バル事件の發起人であり、商人にして、經濟人、化學者にして醫學者而も俗務の人である。その生れは獨逸で、一七九五年

以來アメリカに住しフライラデルフイアに商館を建設したのであつた。そしてラファイエットを通してマヂソン、ジェファースン等と知合つた。かくてマヂソンは彼をロツテルダムの領事とし、サント・ドミンゴの通商官として二重の職務に就かした。しかし歐洲に戦亂が擴大すると共に彼も悲運に際會して一八〇三年破産せざるを得なかつた。化學業を創めたり、造花を造つたり、蒸氣のボートを造つたりしたのは此時である。もつと必要なのは經濟上の論著によつてベーリングゲヤ大統領マヂソンにそのパンフレットを送つたことである。この事からジェファースンが彼を歐洲に派遣することゝなつたのである。そして維納でキアスルリーに面會し、又獨逸浪漫派のフリードリヒ・シュレーゲルアーダム・ミューラー、ピラート、ヴァルンハーゲン・フォン・エンゼ等にも彼の影響は強い。政治上ではスタディオンの信頼を得、ビュローウも彼を賞讃してゐる。彼はキアスルリーには失望されたが、タレーラン、フムボルト、ハルデンベルヒ、メツテルニヒ等には注目すべき人として認められてゐた。これがオーストリアとアメリカとの通商上の關係に大きな影響を與へたことは云ふまでもない。このボルマンのオーストリアに於ける交渉の成功はフォン・レーデラー伯の紐育派遣となつて現はれた。一八二五年にはレーデラ

1 は米埃兩國の通商條約の交渉を始めこの條約は一八二九年八月に署名され一八三一年兩國政府間で批准してゐる。兎に角アメリカを歐洲と商業上に結び付ける大きな基礎としてのボルマンの功績は忘れられないものであらう。

Neugebauer, O. — The Chronology of the

Hammurabi Age. (Journal of the Amer. Oriental Society, Vol. 61 (1941) No. 1 (March)

pp. 58—61) ハムラビ時代の年代測定—亞米利加

東邦協會雜誌第六十一卷第一號) 辛 島 重 義

ハムラビ王時代の年代に關しては最近の史學者は少くとも二百七十五年以上の訂正をなしてゐる。これは先づ Thureau-Dangin がユーフラテス中流のマリからの發掘の文書を檢討した時に生じた疑問であり、次いで Albright はハムラビ王即位の年代を差當つて紀元前一八七〇年に置いた。二年後に同氏は更に降つて紀元前一八〇〇年と推定した。最近刊行の Smith の著もオールブライトと大體一致する年代で、ハムラビを一七九二—一七五〇年とし従つてバビロニア第一王朝を一八九四年—一五九五年とするのである。スミスはアララク五世を研究して、彼が歿したのはトトモス三世の亞細亞侵略(一四六八年)の結果と考へる。ア

ララク六世はムリシリス一世がアレツポを攻撃した時期に相應し、レヴェル七世の宮殿はシャムシ・アダツド一世、ハムラビ王の時代に屬するものとする。かゝる推定から出發して彼は年代測定をなすのである。バビロン第一王朝の年代を推定するに當つてはスミスはアミダツガ地方に於ける金星出現の觀察の考證から始めてゐる。これと共に必要なのはエヂプトの第十二王朝の年代であり、これがハムラビ王時代の下限を示すのである。そして多くの歴史家達は第十二王朝のシリヤへの影響は一八〇〇年代に終つたとする。第十二王朝の天文學年代測定はA未知の王xの即位七年の八月十六日にソーチスが地平線に上昇した報告とB未知の王yの即位三十年の十月の二十六日に新月が上つたこととの二つの記事から誘導される。先づAの方からこの記事がメンフィスに於けるシリウスの上昇と見做して King x year 1 = 1881 と考へられ従つて King x = Sesostos III と類推し得る。更にBの記事から King y = Amenemes II と考へられ Amenemes II year 30 = 1910 B. C. 更にホルハルトは King y = King x = Sesostos III と推定してBの記事をも満足せしめると謂つてゐる。兎に角天文學的には一八五六、一八四八—一七九二、一七三六年がハムラビ王に關するもので、エヂプトでは未知の王の三十年といふのが一八五一、

一八六二、一八六七、一八八七、一九〇一、一九一
二、一九二六、一九三七と考へられる。かうした數學
的計算からも二百七十五年の年代的差異が認められ
るとするのじきである。(年代數字は何れも紀元前)

Roland H. Baeton, *The Left Wing of the
Reformation*. (The Journal of Religion, Vol.
XXI, Apr. 1941, No. 2, pp. 124—134)

宗教改革の左翼

本 多 四 郎

論者 Baeton はまづプロテスタント運動について次
の如く冒頭する。即ち十六世紀のプロテスタント運動
は not only as a result of a process of disinte-
gration, but also because of an initial divergence
として觀察するべきであり、しかも同時にそれは一つ
て渾然たる統一體をなすものではなくして、個々獨立
の諸運動より構成された複合體であることが記憶され
ねばならない。

かやうに多種多様な諸運動の複合體であるならば、
一體いかなる運動が左翼と呼ばれるのだらうか。論者
は The left wing is composed of those who
separated church and state and rejected the civil
arm in matters of religion. These groups are

commonly on the left also with regard to church
organisation, sacraments and creeds. と述ぐ
べし。その性格を規律し、更に sacraments : Right =
Luther, Anglicans — Left = Zwingli, Calvin, Ana-
baptists — church organisation : Episcopal churches —
presbyterian and Congregational churches
— doctrine : Trinitarian — Anti-Trinitarian —
union of the church and state : Lutherans,
Zwinglians, Calvinists and Anglicans — Anabap-
tists and other spiritual reformers と具體的な分
類を行つてゐる。

しからは左翼と總括される特徴的な思想内容はいか
なる性格を示してゐるのだらうか。

まづ第一に顧みるべきものは倫理的方面である。彼
等は内面的轉心や道德的善行を極度に重視し、あらゆる
外面的・形式的宗教を痛く拒否し、ルター派を以し
てカトリックと選ぶところがないと難詰する。次には
Christian Primitivism の傾向が著しく、バイブルに
のみ權威を認め、その inner word を汲みとらうとし
て神秘主義的色彩を濃厚にし、 Luther, Zwingli,
Calvin を指して Schriftgelehrten と呼び、 Outer
word に拘泥するものとして非難する。第三の特徴と
して注目されるのは eschatology に対する顯

著な感覺である。

嚴密な意味に於ては、*eschatology* と *reformation* とは理論的には相矛盾するものなるにも拘らず、彼等にはかゝる論理的矛盾は峻烈には感ぜられず、寧ろ有力な要因として *eschatology* が採用される結果となつた。これと共に *anti-intellectualism* の傾向が現れて神學的思索を疎外するに至る。併し他方神學的過激派は一種の *Anti-Trinitarianism* に赴いたことも見逃せない。最後に彼等は教會と國家との分離を要求した。即ち宗教の獨目的自律性を主張し、カイザーと神をあくまで二元的に考へて、俗界と教會との混淆を警戒する。社會生活に對しては彼等は成程 *inner-worldly asceticism* を遵守せんとしたが、カトリックのやうな *monasticism* は拒否した。これと共に *Anabaptists* に於ける共產主義がわれわれの特殊な關心を惹かずにはをかなう。

以上左翼の主要な思想傾向が解明されたわけであるが、それではかゝる左翼研究の意義はどこに存するのだらうか。

由來左翼の研究は歴史家によつて長らく閑却されて來た。しかしながら最近に至つてルター派及びカルヴィン派の歴史家による研究が盛になつて來た。それに彼等が彼等自身の運動を理解する爲には、それに對立

する潮流の理解をぬきにしては不可能であるといふ事を悟るに至つたが爲である。しかしながら *A deeper reason for seeking to understand the left wing, in my judgment, is that here we can discover one clue among others to the spiritual cleavage between Germany and the "West". In Germany in the sixteenth century Anabaptism and related movements were thoroughly suppressed and never again raised their heads, whereas in England in the seventeenth century the spiritual descendants of the left wing gained a permanent foothold and did even more than the established church to fashion the temper of England and America.* と論じて、その積極的論據を主張する。云はゞ宗教改革以降宗教史の舞臺は漸次西方に移りしかも西方に於ける宗教—英米人の氣質に適合した—は所謂左翼ともいはるべき性格を有するものであるといふことが豫想されながら、その著しい起源を宗教改革に求めることに於てその特性を把握し、ひいてドイツと西方精神との相違を明かならしめようと意圖してゐるのである。

東洋史研究會(第二回)

一、日時 昭和十六年十二月八日(自午後一時至午後四時)

一、場所 第二學生集會所

一、出席者 重松教授、目加田教授、日野助教授、岸

田副手外學生四名

一、研究發表

1、元史速不臺傳に就て

島尾 敏雄

2、清代の物價(主として米價)に就て

江島 壽雄

3、遼の太祖の遼東經略に就て

日野助教授

莊重雄健なる米英擊滅の宣戰の大詔を拜し、世界史の大轉換、新秩序への第一歩が我が國によつて逞しく踏み出された記念すべき十二月八日に、湧き上る國民的感激を湛えながら奇しくも第二回東洋史研究會を催したことは、私達東洋史研究に従ふ者にとつて誠に意義深い事であつたと思ふ。其の後に舉げられた赫々たる戰果に即應する如く、此の東洋史研究會からも輝かしい成果を生み出す様に協力し努力しようではありませんか。(江島記)

國史學會

十二月十七日

午後一時より第二學生集會所に於て本年度卒業生杉本直喬、阿部光章兩氏の論文發表會を行ふ。論文題目

左の如し。

淨土教成立の一考察

阿部光章氏

大阪江戸間の海運

杉本直喬氏

發表後長沼、竹岡兩教授の批評並に杉本、阿部兩氏の感想發表などあり四時過ぎ盛況裡に散會す。

一月十七日

折からの快晴に恵まれ鏡山講師指導の下に筑後草野文書見學ハイクを行ふ。参加者十數名、九鐵電車により久留米に到り、更にバスに揺られる事約廿分草野に到着、先づ同村古刹專念寺(俗に九州日光と云ふ)に國寶阿彌陀像を拜見、等身大の本尊は藤原末期の優麗さを現し見る者をして欣快の念を懷しめ又同本堂の絢爛眼を奪ひ明治中期の建立にかゝるとは雖黃金造まばゆきばかりなる佛具四壁の華美なる宇治の鳳凰堂もかくばかりと思はしむるものがあつた。境を一にする須佐乃雄神社に詣れば櫛の總作り七重の升組などさすが筑後の宮大工等が粹を蒐め想をこらしたる名残を彷彿たらしめるものあり。更に歩を草野氏の居城發心山城址にすゝめ延々として流れの、筑後開發の古を語る筑後川をはるかに見下しつゝ想をそのかみにいたす事一刻、鏡山講師の歡待による自米の飯盒炊釜に久し振り都の鬱憤をはらし櫻はまだながら小春日和の暖さに聆蕩の一刻を暮した。更に山を下つて同町矢野氏の邸に

到り古墳を見學、同町郵便局長鏡山氏所藏中の草野文書六卷其他地方出土鏡、勾玉石器等參觀す、同文書の一部は筑後國史並に福岡縣資料卷三に收録されたるもので主として鎌倉―室町時代同氏の活動を窺ふに貴重なるものである。

日西に傾かんとする迄同文書閱覽に興じて後再びパスをかつて久留米に至り同地に解散、希望者を蒐めて更に同地水鏡天滿宮並に日岳古墳を見學す、壁面に刻せられた方圓の圖様に此の地方に屢々見出す裝飾古墳の一端を察するを得た。日くれて入り日中天に淡き頃筑紫路の夜寒をみにしみつゝ打連れて歸學す。

二月廿五日

鏡山講師再度御應召のため第六演習室に於て歡送會を舉行す、長沼竹岡兩教授を始め在學卒業生等十六名參集同講師の壯途を敬祝した。國史學會では先に本年度卒業生田村阿部兩氏を更に楡垣先輩を送り今又鏡山講師を送る。既に事變以來出征應召者は十數氏を數へ國家の干城として前線に或は内地に活躍されつゝある今日更に斯等先輩が日頃研磨體得した國家精神を卒業行以て御奉公至すべき機を得られし事に對しては滿腔の祝意と感謝の念を併せ以てその御武運長久を祈る次第である。

一、鏡山講師送別會 鏡山講師再度の光榮ある〇〇部隊へ入隊につき國史東洋史西洋史各學會合同にて二月二十六日市内對馬小路魚絲に於て送別會を開催關係各教官の他法科、文科よりも諸教官の御出席を得て盛大であつた。

一、國史學會近況 先輩楡垣元吉氏は〇〇部隊に入營、田村副手は土浦海軍航空隊に文官教官として研究室を辭し鹿兒島商船學校の江口幸雄氏は今般美學研究室に勤務して史學會に盡力して下さることゝなつた。

昭和十七年度卒業生卒業論文

一 國史

淨土教成立の一考察

大阪江戸間の海運

阿部光章氏
杉本直喬氏

一 東洋史

過渡期的意義に於ける五代美術 岸田(舊姓長末)勉氏

尙本輯所收の論文中、執筆者鏡山猛講師、岸田勉副手共に入隊され、彙報欄擔任の各位には夫々の差支へがあつて、校正共の他に不備の點が多くあるかと存じます、それらに就いては厚く御詫が申上ります。

(辛島重義)

九州史學會本年度委員

顧問

長壽吉

常任委員

重松俊章

長沼賢海

竹岡勝也

日野開三郎

鏡山猛

小林榮三郎

委員

波多野院三

辛島重義

伍賀道一

江島壽雄

本多四郎

書記

青木重種(庶務會計)